

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：33914

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K17099

研究課題名(和文) J.S.ミルを分岐点とした経済学観の転換に関する研究：価値論を中心として

研究課題名(英文) A Study on the Change of Economic View with J.S. Mill as a Turning Point:
Focusing on Value Theory

研究代表者

吉井 哲 (Yoshii, Satoshi)

名古屋商科大学・経済学部・教授

研究者番号：10514341

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：旧来より、J. S.ミルの価値論は需給均衡説と考えられている。しかしながら、彼の価格モデルは、価格と数量が同時決定される法則に全く支配されていない。後世の経済学者はミルが価格設定で使用した「Equation」という用語を「等式」ではなく「方程式」と誤解している。ゆえに、ミルのシステムは、需給均衡説ではなく、時間を伴う逐次プロセスモデルであろう。ジェンキン(1868)は、ミルのシステムを、現在のミクロ経済モデルとほぼ同じであると誤読した。さらに、ジェンキンに影響を受けたマーシャル(1879)もミルの相互需要説を誤読し、経済学に均衡条件と安定条件の研究というテーマを導入した。以上の点を論証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古典派経済学における価格決定の等式をある「均衡への傾向」を表すものと解釈すれば、これは均衡にいたる経緯についての過程分析と言える。一方で、新古典派経済学では価格と数量が同時に決定される市場均衡理論である。と結論付けられる。独創的な点は「Equation」解釈を通じた古典派経済学の再解釈である。この点に関しては世界的に全く研究が進んでいない。分岐点としてのJ.S.ミル体系の正確な理解とそれが曲解して伝わった理由を解明することは、経済学の歴史を正しく理解することにも繋がる。

研究成果の概要(英文)：It is generally considered that the theoretical development in supply-demand equilibrium theory by J. S. Mill from supply and demand ratio theory by Adam Smith and David Ricardo is the most important event in the history of economics. However, his pricing model is not governed by the laws of simultaneous determination between a quantity and a price at all. Followers have been misunderstanding the term “equation” that Mill used in the pricing. Mill’s system is not supply-demand equilibrium theory, but rather sequential process model with time.

Jenkin (1868; 1870) misconstrued J. S. Mill’s system as the view that was almost identical to the present-day microeconomics model. Additionally, Marshall (1879), who was very influenced by Jenkin, misread Mill’s reciprocal demand theory and introduced into economics the theme about the research of equilibrium and the stability condition in his construction of pure theory.

研究分野：理論経済学・経済学説史

キーワード：Equation 過程分析

1. 研究開始当初の背景

経済学説史上、限界革命についての解釈と評価については諸説ある。極大化行動分析という数理的手法の登場に力点を置くもの、古典派の「富の生産理論」から新古典派の「交換理論」への分析視角のシフトとみるもの、あるいは部分均衡を含みながらも一般均衡を軸とする市場均衡分析の成立としてとらえるものなどである。諸説のどれを採用するかは、時期や場所によって力点が変わるものの、基本的には現代ミクロ経済学が基礎とする「価格と数量が同時に決定される均衡理論」へ発展し収斂するものと解釈されている。本研究は、スミス、リカード以降、価格決定においてなぜ古典派経済学の生産費原理が棄却され、新古典派経済学的な需要と供給による価格と数量の同時決定方法へと変わったのか、その「分岐点」を解明しようとするものである。また、それは価格決定方法の転換のみならず、経済学に対する考え方(経済学観)の転換解明でもある。

マーシャルは古典派経済学者である J.S.ミルをベースにしなが、部分均衡の枠組みのなかで、需要サイドと供給サイドが相まって市場均衡が決定される分析装置を体系化したとされる。それゆえ、限界革命期における重要な分岐に関して、古典派経済学者である J.S.ミルに対するマーシャルの認識が重要となる。一般的に J.S.ミルには価格と数量の関数関係、つまり需要関数が存在すると言われ、ミルは需給均衡説と考えられてきた (Marshall 1876; Stigler 1955; Blaug 1962; 南方 1961; 1972; 1978; 森 1982; 馬渡 1997)。しかしながら、この評価は間違いである (吉井 2014)。本研究では、経済学観の転換はフレミング・ジェンキンとアルフレッド・マーシャルが J.S.ミルの経済体系を需給均衡説と誤読したことに由来するものであると考えている。

2. 研究の目的

< 目的 1 . J.S.ミルは関数を重要視してはならず、需給均衡説を唱えていない >

古典派経済学における価格決定モデルは、それぞれアダム・スミスとデイヴィッド・リカードによる需給比率説、トマス・ロバート・マルサスによる需要強度説、ジョン・スチュワート・ミルによる需給均衡説の3種に大別されると一般的には言われている (Marshall 1876; Stigler 1955; Blaug 1962; 南方寛一 1956; 1961; 1962; 1967; 1972; 1978; 森茂也 1982; 馬渡 1997)。そして、これらの理論的展開は、生産費原理による価格決定から需給原理による価格決定への転換が生じた、リカード経済学を「廃物たらしめることを完成」(Schumpeter 1954, p.604 訳 1270)させた歴史であるともしばしば言われる。

特に、ミル体系に価格と数量の関数関係、つまり需要関数が存在すると言われ、需給均衡説と考えられてきたことが大きい。需給均衡説を取るならば、いわゆる現代ミクロ経済学の経済学観と同一の発想であり、ミルがその起源の一人と言えるだろう。すなわち、主観的要因が内在した2つの関数(需要関数、供給関数)の等式によって(グラフで考えるならば交わるところで)価格と取引量が同時に決まる、そして、価格が均衡点から逸脱する場合には再び同一の均衡点に収束するという命題である。しかしながら、ミルの体系全体を鑑みると、需給均衡説を採ることは考えにくい。目的 1 は、このことを論証することである。

< 目的 2 . F. ジェンキンと A. マーシャルによる J. S. ミルの体系の曲解の結果、何が生じたか? >

F.ジェンキン(1868; 1870)がイギリス経済学界に初めて数学的に需要と供給の関数を導入し、グラフ化をおこなった際、ミルの需給均衡説をベースに数学化している。ジェンキンがミル体系を数学化したという主張は果たして正しいのだろうか。また、マーシャルもミルをベースに

しながら、部分均衡の枠組みのなかで、需要サイドと供給サイドが相まって市場均衡が決定される分析装置を体系化したとされる。それゆえ、限界革命期における重要な分岐に関して、古典派経済学者であるミルに対するジェンキンとマーシャルの認識が重要となる。ジェンキンとマーシャルがミルを曲解しており、それが経済学観の転換を生んだことを論証することが目的²である。

3．研究の方法 文献考証を行う。

4．研究成果

<目的1．J.S.ミルは関数を重要視してはならず、需給均衡説を唱えていない>

[投稿中] ”A correct comprehension of the supply-and-demand principle of J. S. Mill: Differences in equilibrium theory between classical and neoclassical economics”

J.S.ミルは財を以下三つに分類する。すなわち、労働と経費をいくら負担しても、生産物の量を増加させることが出来ない財（任意不可増財）、労働と経費を負担することができれば、単位当たり費用を増加させることなく生産物を増加可能な財（任意可増財 A：収穫一定・費用一定）、労働と経費を負担することができれば生産物を増加することができるが、単位当たり費用が増加する財（任意可増財 B：収穫逓減・費用逓増）である。この内、は需給原理、は生産費原理によって価格が決定される。そして、ミルは需給原理を生産費原理に先立つ基本的法則とした。そのため、スミスやリカードとは異なり、ミルは需給均衡説と考えられてきた。しかしながら、この評価は間違いである。ミルは需給原理において「Equation」と言っているが、これを「方程式」と捉え需要関数（D）と供給関数（S）が等しくなるときに価格が導出されると考えてしまうのは安易である。つまり、 $D(p) = S(p)$ により p という価格が与えられるという誤った理解である。このように理解すると、ミルの需給理論は「部分均衡論の先駆け」（Marshall 1876）、「ジェヴォンズさえも及ばない需給均衡説」（Schwarz 1972）という評価となる。しかしながら、「Equation」は「方程式」と「等式」の二つの意味が考えられ、この場合は需要量と供給量が等しいというただの関係を表わす「等式」が適切である。このことを、後世の学者は誤読している。

なぜならば、J.S.ミルの任意不可増財の価格決定は次のような論理に従うからである。すなわち、超過需要の場合にはその日の供給量（一定）はすべて売り切れ、購入することが出来なかった消費者が存在する。すると、買い手の側に競争が起こって、市場価格が騰貴する。競争というのはその商品がどうしても必要であれば値が高くても購入する買い手が存在するという事であり、次の市場日に供給者がそれを理解して値を吊り上げるのである。市場の値が上がったことで追加的な販売者が出現するかもしれないし、購買力の制約から購入することが出来ない消費者が現れるかもしれない。このようなプロセスが市場日毎におこなわれ、供給量増加、需要量減少、あるいはその両方によって、いずれにせよ需要量と供給量が一致する。需給量が一致した市場日においても取引される価格は存在しているので、この価格が任意不可増財の価格（自然価値）となる。

一般的に J.S.ミルには価格と数量の関数関係、つまり需要関数が存在すると言われるが（Marshall 1876; Stigler 1955; Blaug 1962; 南方 1961;1972;1978; 森 1982; 馬渡 1997）、そ

もそも J.S.ミルは価格と数量の関数関係を重要視していない。社会全体の総需要関数と読み取り可能な箇所は存在しているが、個別の需要関数に関しては研究すら放棄している。市場日の間において需要量を変化させる一因が価格であると言っているだけで、現代の一般均衡理論や部分均衡理論が想定するように、価格体系さえ与えられれば、一義的に需要量が定義できる関数が存在するとは言っていない。ミルは関数そのものを理解し、別の箇所(労働など)では関数の変数がわざわざ何であるかまで明記しているが、商品の需要量と供給量に関して関数とは明記していない。以上のことを総合すると、J.S.ミルは需要関数と供給関数自体を重要視しておらず、需要関数と供給関数の交点で価格と数量が同時決定される市場均衡理論ではなく、オーストリア学派やケインズ『貨幣論』、ホートレー、ロバートソンが採用するような過程分析として価格理論を考えていた。

< 目的2 . F. ジェンキンと A. マーシャルによる J. S. ミルの体系の曲解の結果、何が生じたか? >

Chapter8, "An Extinction of Adjustment Time and an Introduction of Stability Condition in Economics through Misunderstandings to J.S. Mill's Law of Supply and Demand and International Value Theory," in Shiozawa, Y. Oka, T. and Tabuchi, T. (eds) *A New Construction of Ricardian Theory of International Values*, pp.245-263, Springer.

フレミング・ジェンキンは、需要と供給の法則を交叉曲線で表現した最初のイギリス人として知られた人物であるが、その彼こそが J.S.ミルの体系、特に国際貿易を含む任意不可増財における価値論をミスリーディングした人物である。ジェンキンは 1868 年の論文において、明確に「J.S.ミルが示した"equation"を数学により表現する」と述べている。その際、"equation"を等式ではなく「方程式」と捉え、需要関数(D)と供給関数(S)が等しくなるときに価格を導出している。つまり、 $D(p) = S(p)$ により p という価格が与えられるという誤った理解をしてしまった。そして、何らかの事情により価格が高騰した場合は、競争によって同じ均衡点に戻ると述べている。加えて、1870 年の論文において、価値論をグラフ化した。これら一連の業績は、J.S.ミルが描いた歴史的過程の分析とは異なり、現代ミクロ経済学の方法論と同一であり、時間概念が消失してしまったと言えるだろう。

Marshall (1879) はジェンキンを高く評価し、図解的手法を取り入れ、ジェンキンによる経済学観の大転換をさらに加速させたと言える。要約すると、マーシャルは「純粹理論」というものを考えていたこと、「純粹理論」は応用理論が扱う現実に可能な限り接近していなければならないこと、そして、それは最も重要な要因だけが影響する法則からなること、ゆえに、数学用語で言えばなるべく変数を減らすこと、「ceteris paribus (他の条件は一定にして)」を考えていたことが挙げられる。ミル父子が貿易理論を物々交換にしたことで貨幣的考察を排除したこと、ミルの貿易理論が数値例で説明されていたために他の数量変動要因が排除されたこと、他の条件は一定にして価値論を考えたこと、ジェンキンのグラフ化により時間的調整過程の概念が排除されたこと、これらがマーシャルへの影響である。すなわち、マーシャルはミルの貿易理論を「主観が介在した需要関数の相互作用(相手国の需要関数は供給関数といえる)によって価格と数量が同時に決定される物々交換理論」と誤読したのである。そして、マーシャルはミルの貿易理論において均衡点の安定条件が欠けていることを指摘し、安定条件の説明をおこなう。

しかしながら、ミルの理論は均衡の安定条件とは無縁のものである。マーシャルが「安定均衡」という概念を強調したこと、そしてそれを経済学において追求すべき問題としたこと、これはま

さに現代の新古典派経済学にまで通ずる経済学観である。それゆえ、ジェンキンとマーシャルが、自身の好む理論枠組みに引き寄せてミル需給原理(貿易理論)を解釈した事が、経済学観の大転換を導いたと結論付けることができる。

<得られた成果の国内外における位置づけ、インパクト、今後の展望>

日本銀行(2000)や日本大学商学部(1996)の調査にもあるように、現実の企業活動においては様々な価格決定方法が採用されている。特に、製造業においては原価計算(特に原価企画)が非常に重要視されており、原価を低下させることなしには消費者のニーズ(留保価格)で売るとは出来ず、企業利益の増加は望めない状況である。すなわち、生産費が重要視されている。そのような現実があるにも関わらず、経済学における価格理論は依然として進展を見せていない。本プロジェクトは、現代ミクロ経済学において価格が需給原理のみで決定(数量と価格の同時決定)されるようになったのはなぜか、その「学説史上の分岐点」を探るものであった。

現代ミクロ経済学においては、経済人が仮定され、それは経済的合理性を追求する完全なる人物を仮定したものである。この経済人概念はJ.S.ミルに負うところが大きいですが、彼の経済人は歴史的・相対主義的なものであり、また、社会環境の影響を受けて変化するものであった。当然需要量は、供給量の調整に時間がかかっている間(市場日と市場日の時間的経過)にも変化するだろう。このような、相対主義的な経済人はジェンキンには見られず、完全合理的な経済人概念がそのまま現代に続いている。現代において、経済人は行動経済学によって否定されているが、経済学とは古典派経済学の時代より本質的に経済人とは少し異なるモデルを考えてきたと言える。すなわち、行動経済学の成果とより親和性があるのが新古典派経済学ではなく、古典派経済学の系譜であるのだ。本プロジェクトによるJ.S.ミル解釈により、このような観点も導出された。

その結果、現代古典派経済学の枠組みにおいて、古典派経済学には存在しない市場理論を行動経済学が形成可能という未来が開かれることとなった。それはすなわち、新しいミクロ経済学と言えるだろう。そのような方向から研究を遂行したい所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉井哲
2. 発表標題 J. S. ミルはなぜ需給原理を基本原理としたのか？
3. 学会等名 経済学史学会第80回全国大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Editors: Yoshinori Shiozawa, Toshihiro Oka, Taichi Tabuchi	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 303
3. 書名 A New Construction of Ricardian Theory of International Values: Analytical and Historical Approach	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----